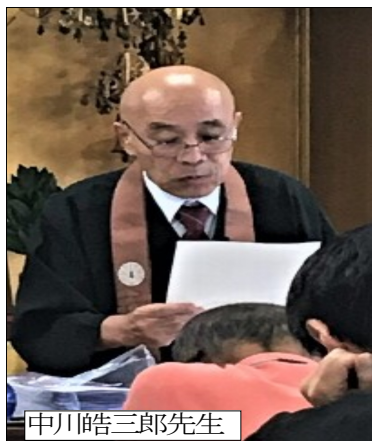


あゆみ通信

VOL. 149

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

お盆に思う 中川皓三郎先生



中川皓三郎先生

「お盆」と言う言葉を聞くと、思い出することがあります。

それは、父が亡くなって、初盆を迎えた時のことです。母について、家の近くにある四天王寺にお参りに行きました。その時、そのようなことが行われていることを初めて知ったのですが、大きなローソクに亡くなった人の法名を書いて、それを灯すのです。

父の法名を書いたローソクにも火がつけられ、煙がもくもくと残暑厳しい夕方の空にたなびいていきました。ふと隣にいる母を見ると、炎とたなびく煙をじっと身じろぎもせず見つめているのです。母は、亡くなった父のことを思っているのだなあと、その時感じました。そして、思ったことは、人間はこれほどまでしても、共に生きた人たちと、一つに出会いたいと思っているということです。

ところでこの「お盆」と言う行事は、「仏説盂蘭盆経」と言うものに由来しています。お釈迦さまのお弟子で、神通第一と称される目連尊者が、智慧によって開かれた目で、亡き母が餓鬼の世界に堕ちていることを知ります。その母の苦しみを助けようと、鉢にご飯を盛って差し出します。ところが、母が鉢を手を持っ

て食べようとする、ご飯が燃え盛る炭となってしまう、食べることができません。それを見て、目連尊者は号泣します。そして、お釈迦さまにどうしたらいいのでしょうかと尋ねます。すると、お釈迦さまは、夏安居の終わる7月15日に、仏及び仏弟子たちに食べ物をお供養しなさいと教えるのです。

不思議なことです。母のことを思って差し出されたご飯が、食べようとして口に持っていくと燃え盛る炭になってしまい、食べることができないというのです。どうしてなのでしょう。それは、私たちの身近な者を思いやる心がどれほど真剣であっても、その心は、自分の都合を優先する心です。だから、自分の都合を離れて、一つに出会うことができないのです。

そして、仏と仏弟子たちに供養することが勧められたのは、「一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり」(「歎異抄」第5章)という目覚めを持つことが願われてのことなのです。その目覚めを持つとき初めて身近な者たちとも一つに出会うことができるのです。

(「真宗の生活」2010年より)

第2組聞法会

日時 8月28日(土)午後2時
会場 光照寺(天王寺区上汐)
講師 広瀬俊先生

(17組 法観寺)
参加費 500円
なお、コロナ感染
状況によりましては、
中止もありますので、
組長寺院(光照寺) 0
6-6771-3031までお問い合わせ下さい。

なお、次回の聞法会は9月27日(月) 佛足寺です。



親鸞のことば 「聞く」とは 「信じる」こと

きくというのは、本願を
ききてうたがうところ
なきを「聞」というなり
(一念多念文意)

日常の中で、音楽を聞いたり、人の話を聞いたりしますが、ここでの「きく」は、阿弥陀さまが私たちに呼びかける声なき声を聞いて、疑う心の無いことを言います。阿弥陀さまは苦悩する私たちを悲しんで「浄土に生まれようと思ひなさい。この私にまかせなさい」と、呼びかけています。その呼び声を疑いなく信じることを「きく」と言うのです。

(名古屋別院「人生を照らす親鸞の言葉」より)

阿弥陀の掌の上

「自力というのは、わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまざまの善根をたのみひとなり」

親鸞聖人85歳の「一念多念文意」の言葉である。

昔、物語やテレビで見た「西遊記」で、孫悟空が阿弥陀仏(物語ではお釈迦様)と掌から脱出できるかを約束。筋斗雲に乗って飛び出します。はるか先まで飛んで、5本の柱のそばへるところまで来て、柱にサインをし、お釈迦さまの掌から飛び出した証拠として残して、戻り「どうだ」とばかりお釈迦さまに。お釈迦さまは笑いながら、掌を開けると、そこには悟空のサインが。親鸞聖人は「自分だけの力を当てにして生きるものではない。努力できるのも、多くのご縁に支えられているからこそ」と教えられます。大好きな川村妙慶さんの「人生が変わる親鸞のことば」を読んで思い出しました。「縁起の法」は、最近亡くなられた中川皓三郎師の晩年の法話で何回も繰り返して教わりました。(本)

紙上法話 大無量寿経の仏道⑤ 延塚知道先生テ



そして「凡小を哀れんで、選んで功德の施することをしたす」功德の宝と言うのは、本願を建てて凡夫を救うために、その中から名号を選び取った。だから、名号を説いた、念仏を説いた經典である。本願を建てて、そして凡夫を救うために念仏を説いた。

本願を建てたり、念仏を選んだのは、これは修行して悟りを開くような人を育てるために説いたんでない。修行もできないような、大地にはいつくばって生きていくような、人間を救うために説いたんです。そういう風に読まないで、いけないわけです。

それで、この大意にはもう一つある。お釈迦さまが、この世の中にお出ましなられたのは、群萌を救うため。群萌と言うのは草の芽のこと。

インド行くと、乾期と雨期とでは、全然違うんや。乾期に行くと雨が全然降らないから草が全部枯れとる。大地は真っ赤、ところが死んでるかと思ったら、雨がパーッと降ると真っ赤な大地に芽が一斉に出る。生きてんのやな、土の中で、それを群萌という。

私たちの先輩たちが、そうやって一生懸命生きてきた。そういう姿を群萌と言うたうえで表しているわけです。そういう人を救う。お釈迦さまがこの世の中に出たのは、軍萌を救って、恵むに真実の利をもって施す。真実の利と言うのは、本願を説かれたこと、これだけのことが言われています。

悟りを言葉にした

「大経」と言う經典は、阿弥陀さんとお釈迦さんと二人いる。お釈迦さんはこの世に出てきて、群萌を救うために自

分の悟りを、誰にでもわかるように本願として言葉にした。

他のたくさんの經典は、難しくてよくわからない。だけど「大経」は「法蔵菩薩が生まれて」と言うことを、本願として言葉にしている。だからお釈迦さまの悟りは、私たちの世界を超えているから、本願の一番最初は、「地獄・餓鬼・畜生の無い国にしたい」と言うところから始まる。

だから私たちの、いつも地獄・餓鬼・畜生を作っている人間の世界とは違う、悟りと言うのがある。違うんやでと、その違う悟りを、言葉にして説いたのが「大経」です。本願として説いた。

そこに説きだされた名前が、阿弥陀の浄土。浄土と言



うのはお釈迦さまの悟りの名前です。阿弥陀さまがそこにおられるって、神話的に説かれてるけれど、これはお釈迦さまの悟りの内容を言葉にして表現しているんです。

だから、お釈迦さまは群萌を救うために、本願を説いた。そこに説かれている阿弥陀さまは、本願を建てて、凡夫を救うために念仏一つを選んで恵んでくれたんやと、そう言うのが「大経」なんです。

阿弥陀さまもお釈迦さまも、群萌や凡小にお釈迦さまの悟りを何とか渡そうとして、本願を説き、名号を説いたわけです。仏教の基本は、苦からの解脱や。仏教は、研究したり勉強したり、そんなことはどうでもいいんです。

人生の中で何度もつまづいて、もうどうしていいかわからん、もうどうにかなってしまいたい。そういうものをみない人生の中で、引きずるようにして生きとるんです。それをどうやって超えていったいのかって言うのが、この生の人間の問題や。

それに直接答えが出なかつ

たら、仏教でないんです。研究とか勉強とかが、仏教じゃない。苦からの解脱と言うのが起こらなかつたら、仏教じゃありません。ハッキリしとるんや。苦からの解脱や。

自分は正しい

その句をどうやって超えるかと言うのに、二通りある。たとえば、苦しみが起こったときに、ふつう人間どう考えるかと言うと僕らは生まれてから人間になつとる。そして、いつでも自分の業を引きずって、自分が正しいと執着する。みんなが、そういうものを生きとる。

いつでも本能的に、自分は正しいと思っている。だから、なんかいやことが起こると、他人の悪口はよく言います。他人の悪口は言っていると気分がいい。本当にそうやんか。人の悪口はようわかる。

僕も知ってる人の中に、嫌な人があるあいつがおらんかったら、世の中もっと平和だろう。そんな奴がおって、腹立つよやっぱり。

けど腹立つと言うのは、相手が悪いわけでもないね。



自分の方が先に、腹たてとる。人が悪いわけじゃなくて、先に「われ」と言うもんが腹たてとる。そやけど、そのたてとる自分については反省する目がないから、あいつが悪いと思うんや。

「われ」の方が先に腹たて、相手が腹たてそして他人が腹たて、いつもガタピシガタピシもめるんや。もめる元は「われ」の所にあるのに、それに気づかないから、あいつが悪いとかこいつが悪いとか言うわけです。

仏法を聞いているおばあちゃんたちは「そうや、そうや」と言うかもしれん。けど、仏法を聞いてない人は「いんや、あいつが悪い」って言うよ。(つづく)